

# ものの見方・考え方を拡充する教養教育：知の総 合化

著者	谷本 寛文
図書名	京都光華女子大学こども教育研究第2号
開始ページ	1
終了ページ	8
出版年月日	2018-03-01
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1108/00000871/">http://id.nii.ac.jp/1108/00000871/</a>

# ものの見方・考え方を拡充する教養教育

## —知の総合化—

谷本寛文

### I. はじめに

教養教育については、平成9年に出された中教審答申「高等教育の一層の改善について」や平成14年に出された「新しい時代における教養教育の在り方について」をはじめ、各種の答申や報告書で、教養の低下と教養教育の形骸化が指摘されるようになり、「教養教育の重要性とその再構築が喫緊のかだいになっている」との認識が繰り返し提示されるようになってきている。

本論考では、現代社会において重視されるべき教養とはどのようなものか、そのための教養教育はどうあるべきかについて、国語教育の立場からものの見方・考え方に焦点をあてて具体的に述べたい。

### II. 教養教育の概念整理

日本の大学における教養教育は、戦後の学制改革による新制大学の発足に際して導入されたもので、「教養」の形成と、その形成を中心的に担うものとして「教養教育」が重視されてきた。しかし、1970年代には、教養教育の形骸化が問題視されるようになり、1991年には大学設置基準が大綱化され、「教育課程・専門課程」の区分も、一般教育の領域別履修区分と履修単位数の規定も廃止された。この大綱化により、国立大学を中心とした「教養部」の解体が進み現在に至っている。

一般社会においては、これまで「教養」という言葉は、知的・文化的な高尚さやエリート性・高貴性を示すもので、ある種の指標的なものとして使われてきた。また、知識を持っていることが人間を豊かにし、人生を豊かにするという考えもあった。豊富な知識を持っているだけではだめだということは言うまでもない。

近年、実践的・実用的な観点、体験や経験を重視する立場から安易に「教養とは知識ではない」との主張

を聞くことがあるが、それは「知識か経験か」といった二元論的で不毛な議論を生むだけである。

当然のことながら、知識も体験も等しく重要なのである。

### III. 読書と教養の関係

「教養」について、その形成の大きな役割を担っているものとして「読書」をあげることができる。

ここでは、読書教育・読書指導の現状と課題を中心にこれからの読書指導に必要なことは何かということについて論じたい。

#### 1. 国語科における読書教育・読書指導

我が国の国語科における読書教育・読書指導は、坂本一郎や滑川道夫らを中心に図書館教育との関連で推進されてきたという歴史がある。また、興水実は、読書技術の詳細な分析を行い、倉沢栄吉は、国語科単元学習を通して読解・読書指導論を展開し、読書指導に大きな影響を与えてきた。

現在、多くの学校現場では、朝読書、図書紹介、ブックトーク、読み聞かせ、読書記録、アニメーション、ブッククラブ、最近では、書評合戦（ビブリオバトル）など多種多様な取組がなされている。このような中、改めて読書指導の目標を問い直し、子どもたちにどのような力を育成するために何が必要であるかについて明らかにする必要があると考えている。

平成25年5月、文部科学省が国会に提出した「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の報告書によれば、一か月間に一冊も本を読まなかった「不読者」の割合（不読率）は、小学生（4.5%）、中学生（16.4%）、高校生（53.2%）と、学校段階が進むにつれ読書離れが進む傾向にある。この結果を大きな問題点として捉え、これからの読書指導に必要なことは何

かということをはっきりと明かにしていく必要がある。

## 2. 読書の質を問う

ここに挙げる資料1、資料2は、平成25年5月に文部科学省による「子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画」の報告書にある「第二次基本計画期における成果」をまとめたものである。

### 資料1

#### 【家庭・地域における取組】

- ① 図書館数が漸増しており過去最高となった。  
平成20年：3,165館→平成23年：3,274館  
(文部科学省社会教育調査)
- ② 児童室を有する図書館が増加した。  
平成20年：1,938館→平成23年：2,059館  
(文部科学省社会教育調査)
- ③ 図書館の児童への貸出冊数(年間)が過去最高となった。  
平成19年度：約1億3,420万冊  
平成22年度：約1億7,956万冊  
(文部科学省社会教育調査)
- ④ 図書館において読み聞かせなどのボランティア活動を行う者が増加した。  
平成20年：9万8千人→平成23年：11万2千人  
(文部科学省社会教育調査)
- ⑤ 子どもが主体的に読みたい本を選択するために有効な手段であるオンライン閲覧目録(OPAC)導入率  
(市町村立図書館)が上昇した。  
平成20年：84.4%→平成23年：87.3%  
(文部科学省社会教育調査)

### 資料2

#### 【学校等における取組】

- ① 全項一斉の読書活動を行う学校の割合が増加した。とりわけ、朝の始業前に行われる「朝読書」は広く普及した。  
《平成19年》                      《平成24年》  
小学校 94.4% (92.3%) → 小学校 96.4% (91.6%)  
中学校 84.1% (92.2%) → 中学校 88.2% (94.5%)  
高校 36.9% (80.8%) → 高校 40.8% (78.8%)

( ) 内は朝の始業前に実施しているもの。

(文部科学省学校図書館の現状に関する調査)

- ② 図書教諭の発令は、12学級以上のほとんどの学校で行われている。

《平成19年》    《平成24年》

小学校 99.2% → 小学校 99.6%

中学校 98.5% → 中学校 98.4%

高校 96.2% → 高校 95.9%

(文部科学省学校図書館の現状に関する調査)

- ③ 学校図書館担当職員(いわゆる学校司書)を配置する学校の割合が小学校、中学校において増加傾向にある。

《平成19年》    《平成24年》

小学校 35.7% → 小学校 47.8%

中学校 37.1% → 中学校 48.2%

高校 70.8% → 高校 67.7%

(文部科学省学校図書館の現状に関する調査)

資料1、2から家庭・地域・学校の取組として読書環境の整備と、その成果を見ることができるとは、子どもたちの読書の質の変容を見取ることができない。

『子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画』(平成25年、文部科学省)には、次のような基本方針が挙げられている。

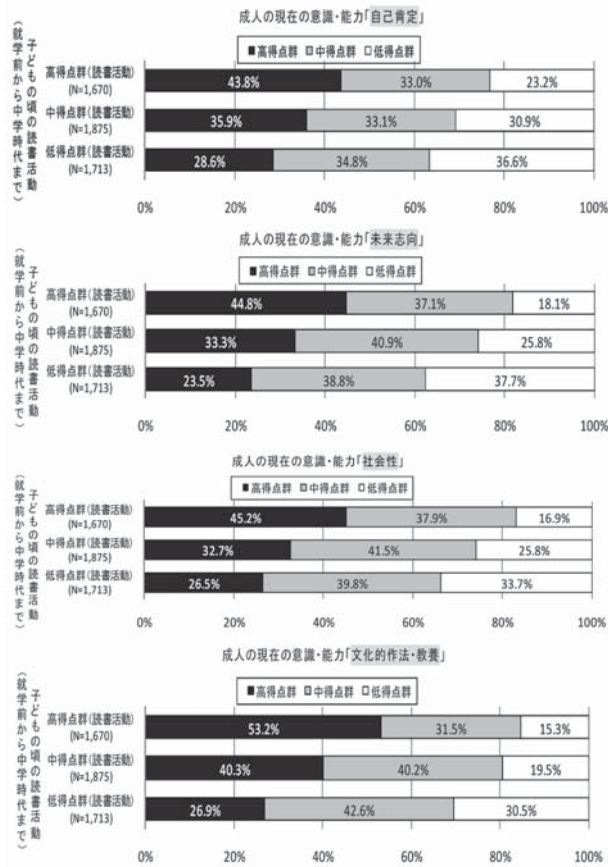
「読書を通じて、子どもは読書力や想像力、思考力、表現力等を養うとともに、多くの知識を得たり、多様な文化を理解したりすることができる。また、書籍や新聞、図鑑などの資料を読み深めることを通じて、自ら学ぶ楽しさや知る喜びを体得し、更なる知的探求心や真理を求める態度が培われる。このため、子どもが自ら読書に親しみ、読書習慣を身に付けていけるよう、子どもの興味・関心を尊重しながら自主的な読書活動推進することが重要である。」

子どもたちが、読書を楽しみ、その価値と必要性を実感しつつ「自立した読者」として成長するためには、国語科における読書指導の目標を明確にし、学習活動の意図と目的を持って取組を進めていかなければならない。学校現場で子どもたちに多くの本を読ませようと、「読み広げ」や「読書記録」など、様々な取組を目にすることがあるが、子どもたちに多読の習慣をつ

けさせることが、将来どのようなことにつながっていくのかと、いう具体的な見通しを持っているだろうか。

読書経験を増やすということは重要なことであるが、さらに重要なことは読書を通して社会的認識、科学的認識を拡充し、自らの生活に生かすことのできるもの見方・考え方を拡充することにあると考える。

平成 25 年 2 月に独立行政法人国立青少年教育振興機構が示した「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」の報告に次のようなデータがある。



多寡の分類は、平均値及び標準偏差を算出し、「平均値 + 標準偏差の 2 分の 1」以上の者を「高得点群」、「平均・標準偏差の 2 分の 1」以下の者を「低得点群」、「高得点群」と「低得点群」の中間の者を「中得点群」に分類されている。この調査結果は、意識・能力として挙げられた「自己肯定感」「未来志向」「社会性」「文化的作法・教養」のすべてにおいて、子どもの頃の読書活動が多い成人ほど、その意識・能力が高いと、いうことを示している。

ここに挙げた調査結果は、読書指導を行う際、子どもたちに多読の習慣を付けることの意義と価値を明確にする際、参考となるものであると考える。

### 3. これからの読書指導に何が必要か

先に、一か月間に一冊も本を読まなかった「不読者」の割合（不読率）のデータを取り上げ、学校段階が進むにつれ読書離れが進む傾向にあることを指摘した。2009 年 10 月に出版文化産業振興財団が行った「現代人の読書実態調査」の結果報告には、中高生を対象とし読書をしない理由（複数回答）が挙げられている。回答が多かった上位二項目は、「本を読まなくても不便はない」（52%）「読みたい本がない。何を讀んだら良いのか分からない」（47%）というものである。この結果を深刻な問題であると捉え、子どもたちを「自立した読者」として成長自立させるためには、多読経験の中から読書の価値を実感させ、目的に応じた選書力を育成していくことが特に重要であると考えている。

「第二次基本計画期間」における成果は、子どもの読書環境を整えると、いう点で一定の成果を上げたと考えるが、今後、更に「読書の質」を高めるための取組が展開されなければならない。では、どうすれば「読書の質」を高めていくことができるのだろうか。それは、読書を行うために必要な諸能力・諸技能を明らかにし、変化発展のある繰り返し中で、スパイラルな読書指導が必要であると考えている。

## IV. 読書の質を問う

### — 論理的な文章の読みを中心に —

#### 1. 疑問をもちながら読むということ

読書の質を高めるために重要なことは、「なぜ」という疑問を持ちながら読むことである。例えば、論理的な文章を読む場合、「なぜ筆者は、このような述べ方をしたのだろう。」という課題意識を常にもって対象とする文章を読ませることで子どもたちは、筆者の意図を考える読みのスタイルを身に付けていく。さらに重要なことは、ものごととものごとの関係、事柄と事柄の関係、つまり、因果関係に着目することである。関係に着目させ、なぜこのような関係にしたのか考えることは、論理を読むことそのものであると考える。

読書の質を高めるために必要なリーディング・リテラシーとして特に重視しているのがクリティカル・リーディング、クリティカル・シンキングの能力である。かつてクリティカル・リーディングは、国語科教育



の中で「批判読み」と訳され、「批判のための批判」「無いものねだりの読み」と批判された時代がある。本来 critical という語は、ギリシャ語の criterion（尺度・基準）に由来する言葉であって、単に批判をするというものではない。「対象とする文章を絶対的なものとして捉えるのではなく、分かりやすい筆者の工夫は自らの表現に生かし、課題があればその原因を考え、建設的な代案を出す。」という読みである。

ここで提示するのは、表現者の観点から見たクリティカル・リーディングによる論理的な表現力の育成についてである。論理的な表現に係る基準や観点、視点を持ち、筆者は「なぜこのような題にしたのか」「なぜこのようなことを取り上げたのか」「なぜこのような順序で文章を組み立てたのか」「ことがらとことがらの関係にはどのような意味があるのか」等、疑問を持ちながら読むことで表現者の観点から筆者の意図を読み取ることが出来る。批判することを目的とするのではなく、筆者の立場に立って、筆者の意図を明らかにしつつ、「何が分かりやすいのか、その理由は。」「何が分かりにくいのか、その原因は。どうすれば分かりやすくなるのか。」といったクリティカル・リーディングを行うことで、自らのものの見方・考え方を高めていくことになる。と考える。

筆者の立場に立って読むために重要なことは、まず、筆者の結論（主張）を明確にすることである。尾括型、頭括型、総括型の文章で、筆者の結論（主張）部分は異なるが、筆者が何を表現したいのかということをつかむということは、表現のエネルギーになっている核をつかむということである。と考える。さらに筆者の表現の工夫を吟味・評価することは自らの論理的な思考力・判断力・表現力を磨くことに繋がるのである。「なぜを問う」読みの観点が単なる批判的な読みではなく、建設的な読みを生み出すための重要な鍵を握っているといえる。

## V. 「説明する」という学習活動の重視

### 1. 説明することの意味

ソクラテス、プラトンの時代から対話、ディスカッションという行為が重視されてきた。その中で、説明するという行為は認識という観点からも特に重要なことである。

説得力がある説明をするためには、自らの考えを根拠をもとに筋道立てて相手に分かりやすく表現することが必要となる。つまり、論理的な思考力・判断力・表現力が求められるのである。

自分の考えを説明する際、重要となる観点は相手が納得できる説明になっているかどうかということである。豊富な知識とともに多角的なものの見方から論理的な構成を組み立てることが重要である。説得的な表現力を身につけるうえで読書という行為は重要な役割を果たしている。ただ単に、対象とする文章があるがままに受け入れるのではなく、読むことを通して表現者のものの見方・考え方に触れること、そして、疑問を持ちながら、じっくりと考え、対話をしながら読むという姿勢を身につけることで知識の枠を超え、実生活に生きる教養として高まると考える。

また、説明するという行為を通して自らの認識について客観的に自己評価することが可能となり、教養の重要性を実感することに繋がるのである。

### 2. 多角的なものの見方・考え方

ものごととものごととの関係を整理し、自分の考えを筋道立てて考えることのできる論理的思考力は、創造的思考力へと発展させていきたい。創造的思考力は問題解決の場で磨かれるものである。違う立場や方向からものを見たり、既有知識や経験の組み合わせや組み替えを行ったりすることで創造的な思考が生まれることを肯定的評価や指導的評価によって児童に実感させることが重要である。

例えば、概念崩しの学習場面を設定したり、多角的にものごとを捉えなければ判断できない場面を設定したり、その具体は様々な内容が考えられるが、一貫して多角的なものの見方・考え方の価値を実感させることで創造的な思考力を育成するという筋を通すということが重要なのである。

これまで、国語科教育における論理的な文章を教材とした説明的文章の研究については、倉沢栄吉(1972)<sup>1)</sup> 渋谷孝(1980)<sup>2)</sup> 小田迪夫(1986)<sup>3)</sup>、森田信義(1998)<sup>4)</sup>、井上尚美(2008)<sup>5)</sup> など、多くの文献がある。しかし、多くの学校現場では、論理的な思考力・判断力・表現力の育成に係る課題が経年課題となっている状況である。その背景には、説明的文章を論理的な文章と捉えるとき、そもそも「論理」とは何かという

ことが明確にされていなかったということが挙げられる。このような課題を克服する新たな理論として難波博孝（2010）がある。「論理／論証教育の思想（1）」の中で「論理」の定義が明確でなかったこと、語用論的な観点を持ち得なかったこと、「論理」を様々な意味で使ったことなどを指摘した上で、「論理」を因果関係と定義している。

また、「因果関係」には、事実と事実をつなぐ「原因—結果」と、事実あるいは意見と意見をつなぐ「根拠—主張」とがあると述べている。

さらに、Stephen Toulmin（1958）による「Toulmin model」を取り上げ、「論理」と「論証」について「論理」は「因果関係」であり、「論証」は、「論の進め方」である、と述べ「推論する教育」の重要性を説いている。このことは、グローバル社会において他者の考えを理解しつつ論理的に思考・判断し、自らの考えを筋道立てて分かりやすく表現する力の育成において極めて重要なものであると考える。参考にトゥルミンモデルの図式を次に示す。



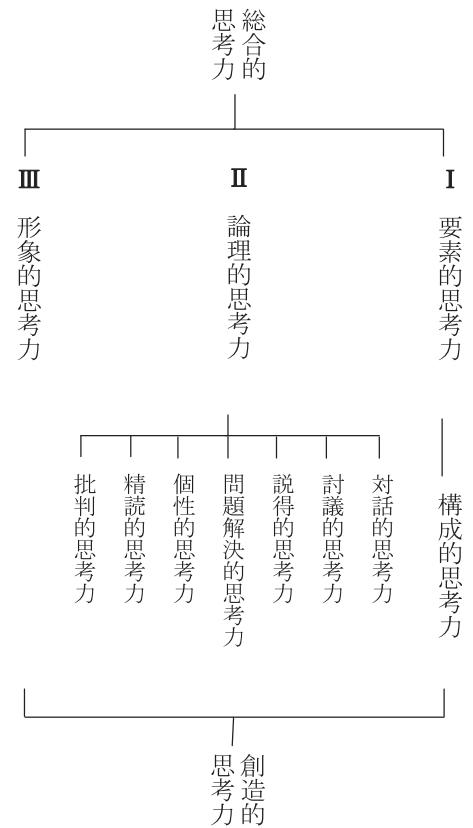
以上のことから、論理的な思考・判断と論理的な表現をつなぐ授業改善の具体として、表現者の観点からみた読解と書くことの関連指導単元の開発が必要であると考える。

## VI. 構造的なものの見方・考え方

### 1. 創造的思考力の育成

「木を見て森を見ず」という言葉がある。部分的なものの見方ではなく、全体から部分を見ること、部分から全体を見るのが重要なのである。創造的な思考力、論理的な思考力を構造的に捉え、具体的な学習活動をバランスよく構成しなければならない。

1987年『教育科学 国語教育 11月号』明治図書に野地潤家は、試案という形で「国語学力としての論理的思考力」について次のように述べている。



「国語科教育において、思考力の育成と精練とをめぐるとき、その中核には、I 要素的思考力、II 論理的思考力、III 形象的思考力が見出される。これら三つの思考力（I、II、III）は、統合的思考力のもとに、創造的思考力を生み出すものとして機能する。」

「戦後の実践に欠けていたもの」として、論理的思考力に焦点をあてた提言が25頁から30頁に紹介されている。1980年代には、すでに科学的な研究者により創造的思考力、論理的思考力の育成についてその重要性が構造的に示されているにもかかわらず、今日、多くの学校現場では創造的、論理的思考力をどのように育成していけばよいのかという共通の悩みを抱えているのではないだろうか。

筆者は、野地が提示する「国語学力としての論理的思考力」に大きくかかわるものとして、論理的認識力を重視している。表現者が何を目的に、どのようなことを取り上げ、どのような論理構造で述べているのか、という表現者の論理を読み取り理解する力が論理的思考力の質を大きく左右すると考えている。また、「批判的思考力」については、かつて教育実践において「批判の為の批判」「無いものねだりの読み」と批判を受けた読みではなく、良いものは良いものとして評価し、

課題がある場合には、建設的な代案を出すことのできるクリティカル・リーディングとしての位置づけが必要である。

論理的認識力と論理的思考力が総合的にかかり合い、創造的思考力へと発展していくと考える。

## Ⅶ. 海外の国語教育

### 1. アメリカの国語教育

アメリカでは、2010年全米共通学力規準（Common Core State Standards）が発表された。ブッシュ政権下のNo child Left Behind Actに続く学力向上のための国家教育戦略である。国家としての教育戦略は国の機関で定められているが、各州において独特の特徴ある義務教育が行われている。大きな特徴は、社会が求める国語力、社会で生きる国語力を明確にし、それに必要な資質・能力を育成するためのカリキュラムが設定されており、それはシンプルさを感じる。また、教材の設定、取り扱い方にも大きな特徴がある。ある高等学校の授業では、一年間に十冊ほどの本をそのまま教科書として使用している。

国語の評価は大きく「読むこと、書くこと、話すこと」の三つになっており、具体的には次のようなものである。

#### ①読解力（Reading）

- ・内容の理解度（Comprehension）
- ・流暢さ（Decoding/word attack）

#### ②作文（Written Language）

- ・考えを分かりやすく書けるか  
（Express ideas clearly）
- ・文法・構文（Mechanics）
- ・スペル（Spelling）
- ・文字の書き方（Handwriting）

#### ③スピーキング（Oral Language）

- ・考えを分かりやすく伝えられるか  
（Express ideas clearly）
- ・小グループの議論に参加できるか  
（Participates in small group）
- ・大勢の人の前で自信をもってはなせるか  
（Demonstrates confidence before a group）
- ・クラス全体の議論に参加できるか

#### （Participates in whole group）

①～③のような評価をもとに育成すべき国語力を明確にした上で、教師はテキスト（教材）を準備するのである。

つまり、教材ありきではなく、育成すべき学力から教材の選定が行われ、授業プログラムが立てられているのである。当然のことながら教師の力量が問われることは言うまでもない。

ここに取り上げたアメリカでの国語教育から読書の質を高めるための重要な視点を得ることができる。それは、学校教育において学習者（児童・生徒）を「自立した読者」として成長させるために必要な能力、リーディング・リテラシーを明確にし育成すべき学力から系統的な読書指導を行うと同時に、自由な読書を重視するということである。

平成27年1月17日、京都の大学に通う四名の帰国子女にオーストラリア、カナダ、フランスでの教育についてインタビューをした際、日本の国語の授業と大きく違う点を次のように話してくれた。

「日本では、先生が持っている答えを考えて発表する。いろいろな人に発言させて先生がまとめたり、先生が作品について解説したりすることが多いけれど、向こうは答えが一つではないことについて考え、ディスカッションし、先生は納得できるプレゼンに対して高く評価してくれました。」  
「宿題は、いろいろな本を読み、エッセイを書くというものが中心でした。いろいろな人の感想やその根拠が聞けてとても面白かったです。」

このインタビューで感じたことは、様々なジャンルの本や新聞記事等が教材とされ、自分の考えをいかに相手に分かりやすく納得してもらおうかという論理的な思考力・判断力・表現力の育成が目標となっているということである。

### 2. カナダの国語教育

三森ゆかり（2010）は、カナダ・アルバータ州の公立学校を訪問し、そこで行われている母語教育について次のように紹介している。

「カナダの公立高校においては、カナダ国内で通用する言語力を超えて、国際社会で機能する言語力を備えた人材の育成をカリキュラムの目標としている。このようなグランドデザインに基づいて



構成されたカナダの公立高校における教科としての英語（English Language Arts）は、その基本的な目標を次の二点に置く。一つは、文学作品の特徴や芸術性を理解し、鑑賞する能力〔ここでは日本的な意味での「鑑賞」ではなく、批判的読書力（Critical reading）を基盤とした鑑賞〕を育成することであり、もう一つは、言葉を理解し運用する能力を育成し、コミュニケーションの様々な目的や相手、状況に応じて言葉を有効に使いこなせる能力を育成することである。カナダでは、文学作品の鑑賞、すなわち批判的読書力（Critical reading）と言語の有効な運用能力は、社会的責任と社会貢献意識が高く、生涯にわたって学習意欲の高い人間に育てるために必要不可欠であると考えられている。

高校の英語（ELA）で使用されるテキストは、文学作品とそれ以外のテキストであり、それらは口頭、印刷物、ビジュアル、マルチメディアなど様々な形式で扱われる。学生自身も様々なテキストを創作したり、ビデオ映像の制作などを行ったりする。印刷物のテキストとしては、書物、新聞、雑誌、機関誌などが扱われる。日本と異なり、英語（ELA）では、年間5～6冊程度の書物が扱われるのが一般的であり、書物は学校から生徒に貸与される。学校で使用される書物については、教育委員会で「使用すべき図書一覧」が作成されており、さらに出版社から直接学校に親書が見本として送られてくる。英語（ELA）で書物を一冊扱うことが常態化しており、出版社、教育委員会、学校が一体となって良書を高校生に与えて読ませ、議論させ、小論文などを書かせるという体制と循環が成立している。」

カナダの母語教育もアメリカの母語教育と同様に、社会に生きる母語教育の目的が色濃く打ち出されており、教材においても目的に応じた意図的な教材が準備され、文学作品を一冊丸ごと読ませ自分の考えを表現させるという共通点がある。

## Ⅷ. ものの見方・考え方を拡充する教養教育

ここでは、平成29年に京都光華女子大学こども教育学部の授業、国語（書写を含む）で実施した「教養

教育が生む新たなものの見方・考え方」をテーマとした文学的文章による実践研究を紹介する。

実践研究の内容は、オランダ出身のアメリカの絵本作家レオ＝レオニによる『スイミー』（Swimmy）を題材に対象者のものの見方・考え方が教養教育によりどのように変化するかを検証するものである。

実施日時：平成29年10月6日 第4講時

対象者：京都光華女子大学こども教育学部こども教育学科1回生88名

授業の主な内容は、以下の通り。

1. 個人で『スイミー』を読み、感想を書く。
2. レオ＝レオニの人生について調べる。
3. 改めて『スイミー』を読み、感想を書く。
4. 全体で意見交流を行う。

『スイミー』という作品は、1963年に出版され、日本では谷川俊太郎が訳した日本語版がある。光村図書出版が発行する小学校第2学年用国語教科書に1977年から掲載されている子どもたちに人気の作品である。

大きなマグロに襲われ、一人ぼっちになったスイミーは、さびしく孤独な思いをするものの、これまでしらなかった素晴らしい海の世界を知り、元気を取り戻していく。また、岩陰に隠れて暮らす弱く小さい魚たちに呼びかけ、協力して大きな魚を追い出す姿が多くの子どもの感動をよぶ作品である。

レオ＝レオニの人生を概観すると、以下のようなことがあげられる。

- ・1910年、オランダのアムステルダムで生まれる。
- ・14歳の時にイタリアへ移住。
- ・1939年、イタリアのファシスト政権誕生と人種差別法公布により、アメリカ合衆国へ亡命。
- ・1959年、孫のために書いた『あおくときいろちゃん』で絵本作家としてデビュー。
- ・1962年、再びイタリアに戻る。
- ・1999年、イタリアのトスカナ州で死去。

レオ＝レオニの人生について調べた後に改めて『スイミー』を読み返した学生は、次のような感想を述べている。（特徴的なものを紹介する。）

小学生の頃、『スイミー』を読んだ時には、みんなで力を合わせると、自分より強いものにも立ち向かうことができるという話だと感じました。それ以上深く考えることはなかったが、レオ＝レオニの生



涯を調べて『スイミー』を読んでみると、まぐろはファシスト政権で、岩かげに隠れていた小さな魚たちはファシスト政権におびえる民衆のようにも感じられた。

まぐろを「ミサイルみたいに」と例えているが、その表現は、ただ「速くつっこんできた」ということを表現しているのではないと感じた。「ミサイルのように」とはまぐろを小さな魚たちの命を奪う存在としてとらえた。あえてミサイルに例えていることにも意味があると感じた。

作者の生涯を調べて『スイミー』をあらためて読んでみると、絵本の中の話だけでなく、「社会や生き方に重ね合わせることができるなあ。」と思った。

このような視点から『スイミー』を読むことで自分自身の視野が広がった気がした。

レオ＝レオニの人生を知らずに『スイミー』を読むと、最初はひとりぼっちだったスイミーが、最後はみんなの中心になって、全員を助けるヒーローみたいですごいいいと思いました。しかし、レオ＝レオニの人生を調べた後に、この作品を読むと、イタリアのファシスト政権が誕生した当時のつらくて暗い背景が重なりました。でも、勇気を持ってみんなで見れば、光はある。希望はある。というレオ＝レオニの前向きな気持ちが伝わってきて、より作品を深く読むことができました。

自分になかった知識が、少し調べるだけで、こんなにも見方や考え方が変化することに驚きました。ものごとを様々な角度から見ることは、自分の考えを深めたり、今まで見つけることができなかつた世界を新たに発見したりすることにつながると感じました。

読みには様々な姿がある。作品自体の素晴らしさを読むということもあれば、作者がどのように生きてきたかということや社会をとりまく状況はどうであったかなどということと関係付け、新たな発見につながる読みもある。本実践研究では、レオ＝レオニの生涯を調べるという活動を設定したことが教養教育として意味を持つ。単に知識の習得というのではなく、多角的な視点で自分自身の生活や社会の在り方、自身の生き方など関係付けながら創造的な思考力を働かせるというものの見方・考え方を拡充することが教養を身に付

けるうえで重要であると考えられる。

## Ⅷ. 終わりに

現代社会において重視されるべき教養とはどのようなものか、そのための教養教育はどうあるべきかについて、国語教育の立場からものの見方・考え方に焦点をあてて述べてきた。教養教育において重要なことは、知識が知識として止まるのではなく、創造的な思考に必要なものの見方・考え方を拡充していくことなのである。

## 注

- 1) 『筆者想定法の理論と実践―読むことの学習指導の改革―』、共文社刊
- 2) 『説明的文章の授業研究論』、明治図書
- 3) 『説明文教材の授業改革論』、明治図書
- 4) 『表現教育の研究』、溪水社
- 5) 『論理的思考を鍛える国語科授業方略』、溪水社

## 引用文献

- 文部科学省 (2013) 子どもの読書活動の推進に関する基本的な計画.3.1-5.8
- 難波博孝 (2010) 論理/論証教育の思想 (1). 全国大学国語教育学会. 学会発表. 4
- 三森ゆかり (2010) 『カナダ・アルバータ州の公立高校における母語教育』. 立教大学ビジネスクリエーター創出センター報告書. 13